

Title	ラーマおみくじの由来
Author(s)	長崎, 広子
Citation	ヒンディー文学. 1 P.94-P.106
Issue Date	2006-05
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/26963">http://hdl.handle.net/11094/26963</a>
DOI	
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## ラーマおみくじの由来

長崎広子

インドでは、結婚の相手を決める時など人生のさまざまな節目で、占星術に人々は指針を仰ぎ、星占いが生活の中で重要な役割を担っていることはよく知られている。しかし、これほどたいそうでなくても、また、わざわざ占い師のもとに行かなくても、気軽に自分の運勢を知る方法がある。それは、ラーマ(現代ヒンディーの発音ではラーム)神のご神託を得られるおみくじで、おみくじの本文は今日のラーマ信仰の聖典『ラーム・チャリット・マーナス(Rāmacaritamānasa)』からの引用である。

『ラーム・チャリット・マーナス』(以下、マーナス)は、ヴィシュヌ派ラーマ信仰の聖者トゥルシーダース(Tulasīdāsa)がそれまで知識人の言語で書かれていたラーマ物語を16世紀にヒンディー語のアフディー方言に翻案し、庶民にラーマ信仰が広まる契機をもたらした作品である。その宗教的な重要性もさることながら、文学作品としてもインド文学史上高く評価されている。

さてマーナスは、多くの出版社からいくつかのエディションで出版されているが、一般に流布しているのは、ヒンドゥー教書籍を専門に出版するギータープレス社のものである。このギータープレス版では、本文に先立ち、トゥルシーダースの生い立ちなどの解説とともに、「ラーマ木片占い(Rāma śalākā praśnāvalī)<sup>1</sup>」がある。これは、碁盤の目にデーヴァナーガリーの一字あるいは二文字が書き込まれたもので、一見すると意味のない文字の羅列のようだが、実は読者が何かに迷ったり、先行きに不安を抱いた時に、マーナスか

<sup>1</sup> śalākā は、「木片」と訳したが、木に限定されず先の尖ったものを示す単語である。また、「おみくじ」と訳した praśnāvalī は、本来は「質問事項」の意味であるが、ここでは便宜上「占い」という訳をつけた。

ら回答を得るために作られた、いわゆる「願掛けおみくじ」なのだ。誰でも簡単に神託を得られる優れたもので、パズルのような仕組みのこのおみくじでは、回答を得る過程に醍醐味があるといえる。本稿は、庶民の生活に密着したマーナスの一面を明らかにする目的で、このラーマおみくじを紹介し、その仕組みについて考察を加えるものである。

### ラーマおみくじの成り立ち

「ラーマ木片占い」は、縦横15升の計225升でできた碁盤状のもので、全ての升の中にデーヴァナーガリー文字が入っている(図1)。この占いは使い方を知らなければ占うことができないので、ギータープレス版のマーナスには、解説がヒンディー語で記されている。次に、ギータープレス版の解説を訳しながら、補足説明が必要な部分については筆者がさらに解説を加える。

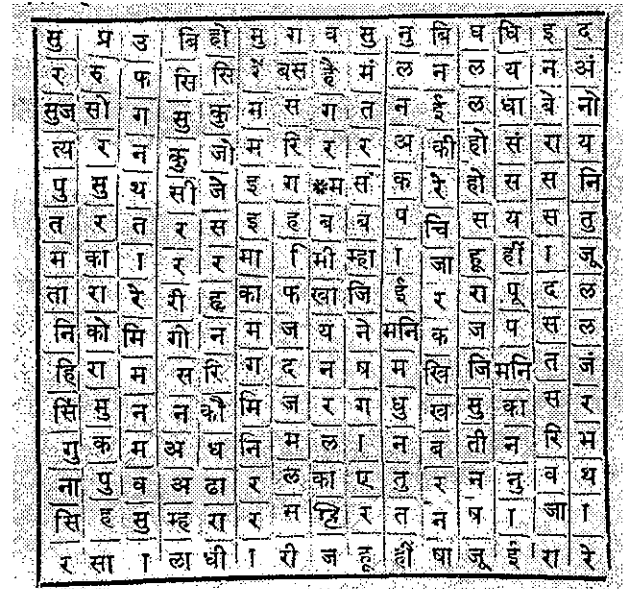


図1 ラーマ木片占い

## 願掛けの方法とおみくじの引き方

この占いによって願いが叶うかどうかの神託を得ようとする者は、まずラーマ神を念じなければならない。その後、敬虔な気持ちで願いを心に描き、おみくじの一升に指か木片を置かなければならない。その升の中に書かれた文字を別の白紙か石版に書かなければならない。願いの神託を得るまで、その升を忘れないように、この占いの升にも、汚さずに、何か印を付けておかなければならない。

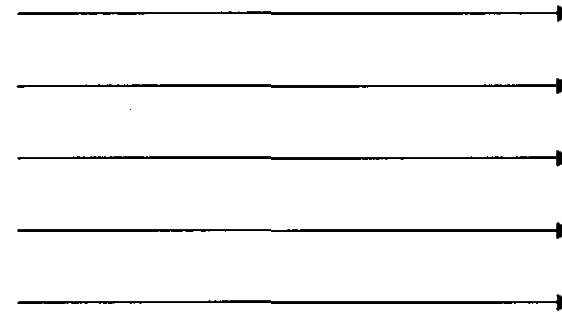
これは、願を掛けて、くじを引くまでの方法の説明である。くじの引き方は、225ある升目の中の1升を無作為に選んで指で指すか、木片を置くというものである。

次に、文字を書いた升から先に進んで9番目の升に入っている文字も書かなければならない。このようにして9番目の文字ごとに順番に書きとめ、最初の升に戻るまで書き続けなければならない。最初の升の文字が9番目の文字になるところまで来ると、願を掛けた者が欲する答えであるチャオパーイーが完成する。āのマートラー記号“|”しかない升や、二文字が入った升があるので、注意しなければならない。つまり、数えるときにマートラー記号しかない升を忘れて、二文字の升を二回数えてはならないのである。マートラー記号の升にあたった時には、前に書いた文字に続けてマートラー記号を書き、二文字の升にあたった時には、文字をふたつとも書かなければならない。

この占いでは、得られる答えがバラバラのパズルのようになっているので、それを組み合わせる方法が上記のように説明されている。答えであるチャオパーイーとは、マーナスで最も多く用いられてい

る韻律の詩形（1パーダは16拍。脚韻には jagāṇa U\_U と tagāṇa \_Uが禁止）である。

解説には示されていないが、最初の升を起点にして9番目の升ごとに文字を拾って書きとめる順は、下の矢印で示したように、左から右に向かって一列ずつ上から下に向かう。



なお、最下段の右端まで来た時には、最上段の左端に戻ってさらに数える。ここで注意しなければならないのは、最上段に戻った時には、それ以降に拾った文字をチャオパーイーの冒頭につけなければならない点である。

少々混乱してきたので、ギタープレスも回答の導き方を次のような実例を示して解説している。

例として、このラーマ木片占いから願いの回答としてひとつのチャオパーイーを導き出してみる。読者は注意して見るように。ある者がラーマ神に祈念して自らの願いを頭に描き、占いの\*の印のついた ma の升に指か木片を置いた時、上に述べた順で文字を数えながら書くと、答えとして次のチャオパーイーが完成する。

ho i hai so ī jo rā ma \*ra ci rā khā | ko ka ri ta ra ka ba dha va hiṃ  
sā śā ||<sup>2</sup>

<sup>2</sup> Rāmācaritamānasa 1. 52. 4

「ラーマがお決めになったようになるだろう。議論して誰がむやみに話をこじらせるものか」

このチャオパーイーは、第一巻のシヴァ神とパールヴァティー女神の対話にある。願を掛ける者はこの回答であるチャオパーイーから、「仕事の成就に疑いあり。ゆえにこれを神に委ねるがよし」との意味を導かなければならない。

このようにして回答を導きだすのだが、マーナスの愛好者はこのチャオパーイーをよく知っているので、ある程度数えたところで、それ以上数えなくても回答の察しがつき、困難は生じない。

#### おみくじの神託

さて、日本のおみくじでは、大吉、中吉、小吉、吉、凶というように、瞬時に自分の運勢のランキングが分かり、それで一喜一憂するのだが、ラーマおみくじにはそのようなものはない。得られる回答はマーナスのチャオパーイーだけである。なお、おみくじの神託である回答は上記以外に8種類あり、計9種類である。以下がそれらの神託である。

1 *sunu siya satya asisa hamārī pūjahi mana kāmanā tumhārī*<sup>3</sup>

「シーターよ、私の真の祝福を聞きなさい。そなたの心の願いは叶うだろう」

出典：このチャオパーイーは第1巻でシーターがパールヴァティー女神に祈りを捧げる箇所があり、パールヴァティー女神はシーターに祝福を与えている。

神託：願を掛けた者の願いはすばらしい。仕事は成就するだろう。

<sup>3</sup> Rāmacaritamānasa 1.236.4

2 *prabisi nagara kīje saba kājāa| hṛdaya rākhi kosalapura rājā*<sup>4</sup>

「心にアヨーディーヤ王（ラーマ）を抱き、町に入り、すべての仕事をしてください」

出典：このチャオパーイーは、第5巻でハヌマーンがランカー島に入るところのものである。

神託：神を祈念して仕事を始めなさい、良い結果が得られるだろう。

3 *ughareṃ aṃta na hoi nibmhū| kālanemi jimi rāvana rāhū*<sup>5</sup>

「だましとおすことはできず、いつかはばれるだろう。カーラネーミ、ラーヴァナ、ラーフのように」

出典：このチャオパーイーは、第1巻の冒頭でサトサング（善き人との交わり）について述べた箇所にある。

神託：この仕事に益はなし。仕事の成就に疑いあり。

4 *bidhi basa sujana kusamgata parahīm| phani mani sama nija guna anusarahīm*<sup>6</sup>

「ブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァ、詩人、パンディットの言葉でさえも、サント（善き人）の偉大さを語るには躊躇する」

出典：このチャオパーイーも第1巻の冒頭でサトサングについて述べた部分にある。

神託：悪い者とのつきあいをやめるべし。仕事の成就に疑いあり。

5 *muda maṅgalamaya saṃta samājū| jimi jaga jaṃgama tīratha*

<sup>4</sup> Rāmacaritamānasa 5.5.1

<sup>5</sup> Rāmacaritamānasa 1.7.3

<sup>6</sup> Rāmacaritamānasa 1.3.5

rājū||<sup>7</sup>

「善き人の集団は喜びであり、吉兆である。それはこの世で歩き回る聖地の王（プラーヤガ）である」

出典：このチャオパーイーは第1巻の信徒の集団としての聖地について述べた部分である。

神託：願いは最上である。仕事は成就するであろう。

6 garala sudhā ripu karaya mitā| gopada śiṃdhu anala sitalā||<sup>8</sup>

「その人には、毒はアムリタになり、敵は友になり、海は牝牛の足になり、火は冷たくなる」

出典：このチャオパーイーはハヌマーンがランカーに侵入する時のものである。

神託：願いは極めて優れている。仕事は成功するであろう。

7 baruna kubera suresa samīrā| rana sanamukha dhari kāha na dhīrā||<sup>9</sup>

「ヴァルナ、クベラ、インドラ、ヴァーユの中で、誰ひとり戦いにおいてあなたの前で堅固な心を保持した者はいない」

出典：このチャオパーイーは第6巻でラーヴァナの死後、妻マンドーダリーの嘆きの箇所にある。

神託：仕事の成就に疑いあり。

8 suphala manoratha hohū tumhāre| rāmu lakhānu suni bhae sukhāre||<sup>10</sup>

「花を得て、ムニは儀式<sup>プージャー</sup>を行った。そして二人の兄弟に祝福を

与えた」

出典：このチャオパーイーは第1巻で花園から花を持ち帰った時に、ヴィシュヴァーミトラ聖仙が与えた祝福である。

神託：問いはとても良い。仕事は成就するであろう。

以上のように、回答であるマーナスのチャオパーイーとその出典、それによって得られる意味が述べられている。ラーマからシーター捜索の任務を命じられたハヌマーンがラーヴァナのランカー島に侵入する時のチャオパーイーは、任務の遂行を示唆するため吉兆とし、一方、ラーマに倒されたラーヴァナの妻マンドーダリーの嘆きのチャオパーイーは不吉の暗示というように、9種類のご神託が選ばれている。これらのチャオパーイーから分かることは、願いが叶うかどうかについての神の意思である。最初の解説で例に挙げられたチャオパーイーに数字がふられていないので、ここで便宜上9という数字をあてるとすると、これら9種類のチャオパーイーの中で願いが叶うご神託は、1番、2番、5番、6番、8番の合わせて5つのチャオパーイーで、これらはいわゆる「当たりくじ」である。一方願いが叶わないものは、3番、4番、7番、9番の合計4つのチャオパーイーの場合である。3番（この仕事に益なし）、4番（悪い人との交際を断つべし）、9番（神に委ねるべし）のように助言付きのものもあるが、いずれにしても願いが叶わないという結果は同じで、くじは「ハズレ」である。

ラーマおみくじと日本の「歌占」

このおみくじは一見したところの複雑さとは逆に、実は単純なものである。基盤の升目は225升あるものの、おみくじの結果が9通りしかない点とその最大の理由で、日本で最もおみくじの番号が少ないという琴平の金比羅宮にしても15番までであるので、いかに少ないかが分かる。しかし結果については、日本のおみくじでは吉の

<sup>7</sup> Rāmacaritamānasa 1.2.4

<sup>8</sup> Rāmacaritamānasa 5.5.1

<sup>9</sup> Rāmacaritamānasa 6.104.4

<sup>10</sup> Rāmacaritamānasa 1.237.2

数が凶よりも多いようであるが、このおみくじでは、当たりが5つに対してハズレは4つなので、当たりの数がひとつ多いとはいっても、およそ半々の割合で、かなりシビアなものといえよう。また、日本の神社のおみくじでは、願事、待人、失物、旅立、学業、商売などのようにいくつかの項目が用意されているのに対して、ラーマおみくじでは、思い描いたひとつの願いに対する回答しか得られないことにも単純さのもうひとつの理由がある。

しかし一方で、チャオパーイーの文字を25分割して碁盤の目に散らすという趣向を凝らした点がこのおみくじの最大の特徴で、単純でありながら、くじを引く者を飽きさせることはない。

さて、現在の日本のおみくじは、平安時代のくじ形式の歌占の伝統を受け継ぐものだという。日常の俗語ではなく、韻を踏む歌謡の形式による神の意思の託宣は、いかにも呪術的な効果を生み出すと考えられたようだが、このラーマおみくじにも同じ要素がある。つまり、このおみくじで得られる回答はチャオパーイーという韻律で編まれた、まさに歌占だからである。マーナスは今日のラーマ信仰の聖典といえる作品なので、おみくじの回答であるチャオパーイーは単なる文学作品からの引用ではなく、「ラーマ神のお告げ」そのものとみなされる。また、日本の神社のおみくじでもらえる紙には、和歌などのみくじの本文に分かりやすい説明文が記されているが、古いヒンディーのマーナスはやはり現代のインドでも一般に分かりにくく、ギタープレス版に記された解説は日本のおみくじの現代文の解説に相当するものと理解できる。

ところで、この占いを作成したのはいったい誰なのだろうか。ギタープレス版の解説の冒頭には次のような断り書きがある。

マーナスの信者である善き人に、ラーマ木片占いについて特に紹介する必要はないと思われる。その重要性和有用性は一般に全てのマーナスの愛好者はご存知だろう。したがって、以下にその形

のみを示し、そこから回答を得る方法とその回答の意味を述べる。

つまりこのおみくじは、ギタープレス版に掲載される以前から人々によく知られていたということのようである。正確にはどれほど前のことなのかは不明であるが、インドでは、このおみくじがトゥルシーダース本人によって作成されたものだと主張する人がいる。しかし、成立年代を特定できない以上、おみくじの回答にふさわしい9つのチャオパーイーを後世の誰かが選んで作成した可能性が高いのではないだろうか<sup>11</sup>。上記のようなことわり書きがあっても、筆者はギタープレスの編者が作成した可能性も捨てきれないと見ているが、少なくとも、ギタープレスの編者がマーナス占いで得られる回答の意味を現代ヒンディー語で記したことに疑いはない。それが現在広く普及したのだろう。なお、マーナスの代表的な校訂版はヴィシュヴァナートプラサード・ミシュル版、マタープラサード・グプト版とナーガリー・プラチャーリニー・サバー版であるが、これらにはこの占いの掲載はない<sup>12</sup>。最近ではモーターラール・バナールシーダースから出版されたマーナスに英語でこの占いが掲載されているが、モーターラール版はギタープレス版に英語訳を加えただけなので、ギタープレス版のおみくじを借用したにすぎない。

<sup>11</sup> 現地調査では、バナールラスのパンディットが写本でラーマ木片占いを見たことがあり、それはマーナスの写本とは別のものだったので、誰かがマーナスのエディションを出版する際に付加したのではないかと筆者に語った。しかし、この情報をもとにその写本を確認することはできず、真偽のほどは不明である。

<sup>12</sup> Viśvanāthaprasāda Miśra (ed), *Rāmacaritamānasa*, Vārāṇasī: Kāśīrāja Saṃskaraṇa, 1962 Mātāorasāda Gupta (ed), *Tulasī granthāvalī*, Bhāga 1 Khaṇḍa 2, Ilāhābāda: Hindustānī Ekeḍemī, 1949 Rāmacandra Śukla (ed), *Tulasī granthāvalī*, vol.1, Kāśī: Nāgarīpracāriṇisabhā,

## インドのおみくじの世界

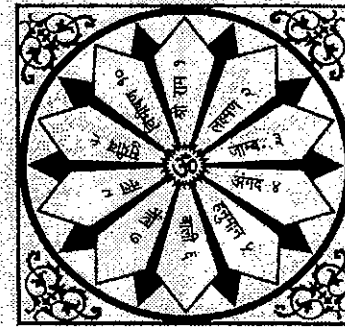
さて、願掛けおみくじということであれば、アングラーのジャイナ教徒の家庭で、二本のこよりに願いが叶うかどうかの印をつけ、プージャーの最後に答えの部分が見えないように一人が持ち、別の人が引くという光景を目にしたことがある。コインを投げて表裏で占うのと同じ原理だが、棒状のものを引く点が日本のおみくじと共通しており興味深い。

ところで、ラーマ木片占いは占い師に占ってもらうものではなく、誰でも簡単に運勢を知ることのできるものであるが、近年では、インターネット上のインドの占星術師のいくつかのサイトでこの占いが公開されている。そこでは、文字盤の上でマウスをクリックすると、別の小さなウィンドウが開き、マーナスのチャオパーイーと神託の英訳が表示される。さらに詳しく運勢を知りたければ、代金とジャナムパトリー(誕生した時の星の並びのチャート)を送る仕組みになっており、ここではラーマ木片占いが占星術師の商売道具に使われている。ちなみに、聖者が作成したという、升が縦横 24 で合計 576 もある占いのサイトもあった。

また、ラーマ木片占いと類似のものとしては、ハヌマーン占い(hanumāna jyotiṣa)が挙げられる。これは一冊の小冊子で、40の項目別に、花びらのようなチャクラが描かれ、花びらには神話の登場人物の名が記されている(図2)。自分の知りたい項目のチャクラに指を置き、そこに書かれた名前を後ろのページで参照すると、その回答が得られるという仕組みである。40の項目には、仕事、旅立ち、病、出産のような一般的なものから、いかにもインドらしいものとしては、死期や神への奉仕、文学者になれるかどうかといったものまである。回答は全て一行足らずの簡単なもので、散文で書かれている。また、チャクラに書かれた名前は神話の登場人物であるが、占いのものは現代の産物である。そのため、ラーマ木片占いのご神託と比べると、ありがたい印象にとぼしい。筆者はこの本をバナーラス

を代表するハヌマーン寺院であるサンカト・モーチャン寺の門前の店で購入したが、店主もラーマ木片占いに勝るものはないと言っていた。

॥ अथ विद्या परीक्षा ॥  
श्रीरामो लक्ष्मणश्चैव जाम्बवानंगदस्तथा ।  
बातात्मजस्तथावाली नल नील सुकण्ठगाः ॥  
विष्णोषणः क्रमादेते विद्या बुद्धि परीक्षण ॥३१॥



जो पुरुष विद्या की चिन्ता से इस चक्र में  
हाथ धर कर देखेगा वह पुरुष नामानुरूप  
अङ्गानुसार फल जान सकेगा ॥ ३१ ॥

図2 ハヌマーン占い

## 結語

以上、簡単ではあるが、マーナスにもとづいて作成されたおみくじについて説明してきた。なお、西洋では聖書などを用いた書物占いが行われているが、それらとの比較検討といった問題については、今後の課題とさせていただきたい。

参考文献

Hanumānaprasāda Poddāra, *Śrīrāmacaritamānasa*, Gorakhpura: Gītā  
Prasa, 1938

中村公一著 『一番大吉! : おみくじのフォークロア』大修館書店、  
1999年